



## 深野池の 生い立ち②

平安時代、大東市域に赤江の御厨が置かれていました。御厨とは魚介や果物の神饌を調達する皇室領で、赤江は今の氷野・赤井です。『類聚国史』には、天長8(831)年に「堤外の赤江と堤内の赤江の2カ所を止め、新たに竹門江、賀沼の絶間江、大治江を加え、摂津の供御江4カ所を止める」とあります。竹門江は分かりませんが、絶間江は寝屋川市の太間、大治江は守口市の大枝です。これらをつなぐと、古大和川が流入する東大

阪市の北部から大東、門真、守口、更に大阪市の東部にわたる大きな湖があったことが分かります。このころの様子は、清少納言の『枕草子』にも、勿入の淵の紹介で出てきますが、当地は古くから都にも知られたところでした。さて、昌泰元(898)年の太政官符に「公私の牧野多く、茨田、讚良、郡の河畔の地にあり」とあるのを見ると、湖の辺は原野で、放牧の馬が走り回っている光景が浮かんできます。



## 深野池の 生い立ち③

鎌倉時代の深野池については、建長4(1252)年の水走藤原氏藤原康高諷状案に出てきます。これは、康高が嫡男の忠持に所領を譲った一覽で、その一項に「氷野河并廣見池・細江等」とあります。当時は、深野池と新開池の区別がなく、東大阪から大東市域にかけて、一つの大きな池となっており、「広見池」と呼ばれていたようです。「氷野河」は現在の氷野のことで、当時の大和川が池に

注ぐ辺りを指したものと思われる。水走氏は現在の東大阪に本拠を置いた当時の有力な土豪で、これらの領有を通じて、漁業権、交通権を確保していたようです。氷野河は、その後、藤原忠夏譲与目録に「氷野山川浮津」、水走長忠知行注進状写に「氷野浮津」と出てきますが、河から浮津(港)へと重要度を増していったようです。